

Management Club Report

Jun.2020/Vol.210

Monthly Opinion 《愚者学経験、賢者学歴史》

210号目の区切りとなる今月のMCLレポートですが、「この表題何と読むのか？」と思われる方も多いと思います。19世紀後半、ドイツ統一を成し「鉄血宰相」と呼ばれたビスマルクの言葉として伝えられる「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」を、字数が多くて書ききれないことから、已む無く自己流の漢文風に並べ替え表現したものです。

この名言の意味するところは、人間は、それが成功であれ失敗であれ、自身の経験を通してより良い対処の仕方や他人への助言などを学ぶものですが、その「経験知」は自分だけの経験から得られたものよりも、同様の経験をより多くの人々が様々な状況や環境下で関わって得られたもののほうが奥深く幅広い。といったことでしょうか。多数の経験知には時間の経過も含めた重畳的な経験知が含まれます。すなわち「歴史から学ぶ」の「歴史」とは、文字通り歴史書も含まれますが、「歴史」と言うほどのものではなくても、多くの体験者と時間の経過によって重ねられた厚みを指しています。

狭い世界での個人的体験を絶対評価してしまいますと、ともすれば視野が狭くなり考え方に偏りが出てしまう危険性があります。この言葉は、得難い「経験」を無駄にしないことの大切さを伝えながらも、そこだけに固執してしまうことの危険性を「愚者」との表現を使って警鐘を鳴らしてくれているのだと思います。

今月前半のメールマガジンは『災い転じて福となした歯科医院実例集』でした。世界的な災禍である新型コロナウイルス感染症の拡大による危機に、どのように対処し何を学んだのか、平時であれば見過ごしていた本質的な重大事に気付かせてくれたものは何だったのか。当に経験から学んだ多くのことが多数の体験談にちりばめられていました。そのような多岐に亘る体験談から再度学ぶことが多くあったとすれば、当に「愚者学経験、賢者学歴史」の実践であるように思えました。今月は、そのメルマガ以降に寄せられた“賢者”の方からの投稿や、伺った歯科医院での見事な取り組みなどの情報をお知らせすると共に、それに付随した考えを述べて参ります。

1

改めて問われ直した医療機関のあるべき姿

DBM研修はこの時のためにあり

メールマガジンの読者である一人のドクターから次のようなメールが届きました。私信ではありますが、ご本人の了解を得ましたので転載致します。